

集まれ!

Tokyo Video Festival for the people

映像ファン。

選りすぐられた入賞30作品。そのいずれもが市民目線で表現された映像メッセージで「想い」が作品に込められた「想い」が観る人の心を動かし、そして今回、史上初の試みとなる「トークフォーラム/公開審査会」。あなたの参加によって会場の熱気は昇り、作品を通じた対話は、また一歩前進していくことでしょう。

東京ビデオフェスティバル2013入賞作品配信中!
ホームページ: <http://tvf2010.org/>



- 10:30 開場
- 11:00 TVF2013 優秀作品上映
- 14:00 審査委員による〈トークフォーラム/公開審査会〉
 - ・大林宣彦氏(映画作家)・小林はくどう氏(ビデオ作家)
 - ・佐藤博昭氏(ビデオ作家)・椎名誠氏(作家)
 - ・高畑 勲氏(アニメーション映画監督)
 - ・羽仁 進氏(映画監督)
- ビデオ大賞発表・上映・表彰
特別賞・優秀作品賞・佳作表彰式
- 18:00 誰でも参加OK TVF 交流会



- 主催: NPO法人 市民がつくるTVF
- 特別協賛: 日本工学院専門学校
- 後援: 大田区、公益財団法人大田区文化振興協会、一般社団法人大田観光協会
- 協賛: テレビ愛媛ビデオリポータークラブ、星の降る里戸別映画学校、NPO 法人湘南市民メディアネットワーク、東京視点
- 協力: (株) 支光社/ビデオサロン、(株) 伸樹社/ビデオジャーナル、いずみ堂、(株) スプラシア、NPO 法人市民がつくるTVF スタッフ&サポーターのみなさん



NPO法人 市民がつくるTVF 代表理事 小林はくどう
〒143-0015 東京都大田区大森西 2-16-2 こらぼ大森 2F
TEL: 03-6404-6613 FAX: 03-6404-6614 Eメール: info@tvf2010.org

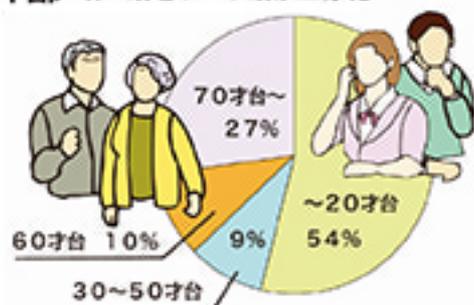
ホームページ <http://tvf2010.org/>

TVF史上初の公開審査会。会場の隅々までが熱気に包まれた。 東京ビデオフェスティバル2013

開催

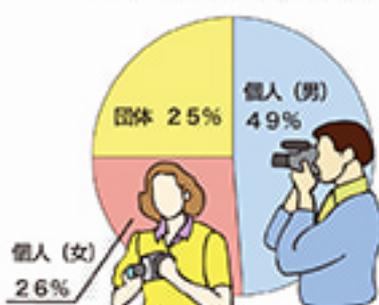
応募241作品の概要分類

■ 年齢 若い層とシニア層が二分化



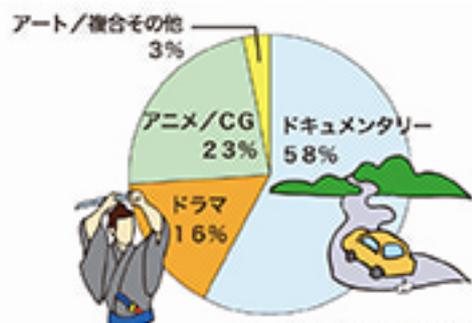
■ 個人/団体

団体が増加。女性が活発化



■ 作品分野

身近な生活の中からの
社会派作品が成長



*東日本震災関連作品は9%

優秀10作品上映会

会場ホールの大スクリーン映像



開会挨拶をするNPO法人
小林はくどう代表理事



特別協賛の日本工学院
専門学校長の千葉 茂 さん



後援3団体を代表して挨拶する
大田区副区長の野田 隆 さん



特別映像授業として視聴参加された
日本工学院専門学校の学生さん

公開審査会 / トークフォーラム



史上初の公開審査会で真剣な討議を繰り広げる審査委員のみなさん



司会コーディネーターの
下村健一さん (NPO 理事)



大林 宣彦 さん



小林はくどうさん



佐藤 博昭 さん



椎名 誠 さん



高畑 勲 さん



北見 雅則 さん (NPO 理事)

応募作品241本（国内237本、海外4本）が寄せられた東京ビデオフェスティバル 2013。通算 35 年目となる記念大会は2013年1月19日（土）、日本工学院専門学校ホール（東京・蒲田）で開催されました。優秀作品上映会から全国各地からの入賞者をはじめとした500名近くビデオファンが来場され、会場は熱気に包まれました。



表彰式

● 佳作



● 永井美千代さん



● 有沢淳一さん
節子さん

ビデオ大賞



● ビデオ大賞に輝いた
内田一夫さん

● 馬場桃加さん



● 長妻 洋さん



● 池田 稔さん



● 原田美恵子さん

● 優秀作品賞



優秀作品賞の作者のみなさん



● 石川 啓さん



● 斎藤 昌さん



● 専修大学田村ゼミのみなさん



● 左翼の未来を考える会のみなさん

筑紫哲也賞

● 筑紫哲也賞の塚原真梨佳さん



市民賞



● 市民賞の佐藤好子さん



入賞者、審査委員、関係者が勢揃いした恒例の記念撮影

TVF 交流会



東京ビデオフェスティバル2013 入賞30作品

優秀作品賞

世界にひとつしかない
それぞれの作品。
作者の「想い」が観る人の
心を動かす。



生きる!

～夢をあきらめない～

有沢 準一・節子 75・71歳

北海道 8分40秒



作者は難聴で、「聴神経腫瘍」と診断される。手術後、肺炎や脳出血となり、長期のリハビリを余儀なくされる。努力を続けた1年後、富士山頂に立つ幸せを得た。夢を持ち続けて生きる事の素晴らしさを実感し、周囲に感謝。妻の献身と撮影に協力した病院の存在が大きい。

冬の陽気を夏に売れ

石川 勝 58歳

栃木県 17分56秒



冬の日光の熱いものは天然氷づくり。冬に切り出して氷室でおくずに寝かせ、夏に売る。5年前廃業の危機にあった氷室を町の仲間たちが受け継ごうと奮闘する。地場産業の復興を果たせるか。美味しい氷づくりには苦勞が多い事を学ぶ。3年間の記録。静止画が効果的。

限界集落に命の糧と元気を運ぶ

二人三脚の移動販売車

内田 一夫 76歳

埼玉県 16分55秒



南牧村は日本一高齢化の進んだ集落だ。山の中間に住む年寄りたちのつかの間の楽しみは移動販売車の来訪。大切な食料補給のライフラインだ。28年続けてきた安藤さん夫婦とは家族同様の付き合いとなり、賑やかな笑いの井戸端会議となる。行政が入り込めない限界集落の現実を取材。

おくりもの

佐藤好子 80歳

東京都 8分12秒



亡夫は映像マニア。受賞がきっかけとなって、妻を使って夫は映像をつくり続けた。妻はいつも夫からの指令を受ける便利屋にならざるを得なかった。おかげで映像嫌いになった妻だが、残された映像遺産を前にして、引き継ぐことを決心し、今では妻が大好き人間となった。

l'esprit en suspens

～福島とフクシマの狭間で～

専修大学田村ゼミナール

東京都 18分30秒



3.11が起きた日、東京で学ぶ福島県人学生4人組はテレビを通して故郷を見つめるしかなかった。自分たちも被災者として見られ、故郷が被災した事実が大きく押し掛かる。「被災者とは何か」と自問自答し、後ろめたさの中で中途半端な自分の立ち位置を確認しようとする。

被災地との絆

～日の出町から田野村へ～

末包 絵万 22歳

中央大学FLP松野良一ゼミ

東京都 17分03秒



岩手県田野村は津波の被災地でたくさんの災害をだした。東京都多摩日の出町から支援しているのは「応援する会」だ。両者には25年前の中学校修学旅行で生まれた絆がある。生徒たちはホームステイし、漁業や農業体験を学んだ。きっかけをつくった元教師が村を訪ね、心の交流が広がっていく。

Gray Zone

塚原 真梨佳 20歳

京都府 12分39秒



沖縄の70%を米軍のフェンスが囲っている。沖縄生まれの女子大生が、オスプレイの配備問題をきっかけに、家族や友だちと沖縄のあり方と複雑な心境を取材しようとする。基地に頼りすぎた沖縄の難しさを当事者の思いとして実感する。結婚して沖縄に住みだした母の発言が興味深い。

「オレの歌」

MC NAM

兵庫県 4分32秒



ラップミュージック映像。「自分とは何者？」と20歳の若者が歌う。ベトナム戦乱の母国を逃れ、ポートビールで日本に辿り着いた家族。そして自分は神戸生まれ、日本名を持つ国籍不明のベトナムラッパー。ベトナム語が不得意で、母国では日本人と言われる心の内を軽快に歌う。

空を見上げて

左燈の将来を考える会

鳥取県 20分



山村を舞台にした石見神楽こども保存会の青春を描いたドラマ。兄ちゃんは家を出て、都会の農業学校へ進学予定だが、神楽好きの彼女に片思い中。落ち込んでいる兄を励まそうと弟は一案を謀る。彼女の家の前で兄が主役を舞う。家族との愛、友情が一杯で少年たちののどやかな演技が魅力。

閉店の譜

原田 恵美子 76歳

愛媛県 8分40秒



夫のつぶやきで60年続いた洋品店の閉店を妻は決意する。様々な思い出を振り返りながら、家族秘蔵で閉店大売出しの準備をすすめる。最後の日の朝礼では皆で涙をぬぐう。顧客資料もシュレッダーで処分。店主のおもひやりの品味が魅力。日本のシャッター通りを連想する。

ビデオ大賞

東京ビデオフェスティバル2013を象徴する「ビデオ大賞」作品は、優秀10作品の中から審査委員会が選出したもっとも優れた作品に贈られます。

〔2013年1月19日(土)に公開審査にて発表〕

筑紫哲也賞

日本を代表するジャーナリストとして高く評語された、故・筑紫哲也氏のご遺族のご厚意により贈られる特別賞です。入賞30作品の中から選出されます。

〔2013年1月19日(土)に公開審査にて発表〕

市民賞

市民がつくるTVF ホームページで配信上映される入賞30作品の中から、TVF サポーターの投票により選出される特別賞です。

〔2013年1月19日(土)に公開審査にて発表〕

東京ビデオフェスティバル 2013 には、海外を含めた 241 作品が寄せられました。その中から選りすぐられた入賞 30 作品は、それぞれが市民目線で表現された素敵な作品が揃いました。世界でひとつしかないオンリーワンの傑作ばかりです。

★印は、オリジナルがハイビジョンの作品です。



佳作

命を背負って ~家族と共に~

北星学園余市
高等学校放送局
(代表: 友善 豪)
北海道 7分55秒



理髪店主は理髪の仕事をしながらもいつもリュックを背負っているのは、難病の「慢性関節炎」のためにいつも点滴を打たなければ生きることができないからだ。幼い子供を抱えた夫婦には開放が難病の不安感がない。取材した高校生は店主の明るさと決して手を放さない人生哲学を学ぶ。

神様からの贈り物

長妻 洋 73歳
茨城県 9分36秒



結婚して 45 年、夫婦で結婚するまで。最近妻は体調が悪く、靴いっつだと診断された。畑でワコンを収穫し、妻も飲むようになる。ゴミ捨て場で西瓜の苗を見つけた。雑肥や糞糞をやり、暑さの中で西瓜は次第に育つ。収穫し、妻は元気になる。夫婦の微妙な空気感が興味深い。

原発の礎

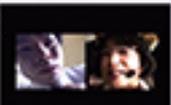
池田 稔 67歳
栃木県 20分



西宮の下町に原発反対デモ隊のタイムアップス隊。上野にマスコミ記事が発表されている。デモも意図的に編集され、記事も原発休止を懸念し、再稼働を誘導する意見と受け止められる。この新聞記事は日本に横たわる情報の構造を示した社会学的インスクリプションアートと理解した。

進め一億火の玉だ!

加藤 秀樹 52歳
埼玉県 9分56秒



野次、騒動中に対しては「相手にしない」と決意宣言をした女官はハイジャック事件の対応を迫られる。犯人たちの要求に対して、「相手にしない」と通告。「貴族ある乗客は機となって玉砂し、飛行機を奪い返せ」と要請する。自衛テロや愛国主義を諷刺した SF ドラマ。

コッコちゃん、どこへ行ったの?

平野 陸弘 74歳
埼玉県 10分40秒



公園で捨てられた 1羽の鶏に出会ったのは昨年の春。今夏、心ない花火でひん死の重傷だったが、市民の手厚い看護で一命を取り留めた。その後も実態は続く。鶏を守る市民運動も広がったが、市が突然公園管理のために鶏が住む小屋を片付け、鶏の姿が消えた。地域の問題を考えるレポート。

母の思い ~あさりと亀さん~

永井 美千代 65歳
千葉県 9分10秒



母は 90 歳だが、本人の希望で一人暮らし。早朝から家事をこなす。野菜をつくり、健康体操も自慢の一つだ。下の弟が白血病になるが、母の願いが効いたのか、無事回復。この後、弟が元気になった感謝にと、あさりと亀さんのお守りを作り出し、臂にあげるのが生き甲斐となった。

SUSANOO -スサノオ-

ArtmicBneo
(Shiro Tomura)
東京都 15分



日本神話の漢性之男をモチーフにしたアニメーション。美を基調とした画面に簡略化した線画のシルエットが造形的。スサノオとヤマタノオロチとの死闘の表現が光る。人間の心に響く性善説と性悪説との戦いと結びつけて興味深い。対称的に最終は平和を白の表現で変化した。

茶髪と坊主

荻野 信夫 69歳
東京都 6分38秒



手描き感覚のアニメーション。高校生の息子が突然茶髪にして、親を叱責させる。親の反対を受け入れない息子。母親も自ら髪型に染め、息子を諭すが、実はカツラだったという落ち。親子の距離の成り立ちを説こうとする作者の懐疑精神が面白い。独特のナレーションが光る。

くつした

加藤 郁夫 29歳
東京都 7分14秒



砂絵の表現に向ったデジタルアニメーション。少年がボール遊びに夢中になり、新しい白の靴下を忘れてしまおう。靴下を盗むと聞かす。母には見抜かれし。母に叱られる内緒の秘密を抱えた葛藤の表現が巧みだ。真っ黒な母の笑顔に愛がにじむ。砂絵の残像表現が美しい。

ディディたちのマナスル

舟橋 栄子 73歳
東京都 10分35秒



ディディとおおきさんをさすネパール語で、女性も加わった登山隊が世界 8 番目の 8000m 級のマナスル山頂到達した快挙の記録。作者も 70 代女性でありながら、ビデオカメラ片手に奮闘する。女性パワーの凄さはおしゃべりにあるようだ。シェルパの住む村の生活の様子も興味深い。

わたしたちは忘れない

福島避難区域の教師たち
清本 雅典 58歳
東京都 19分50秒



原発被災避難区域をルポし、教師の現実を伝えようとした作品。福島県庁が教員研修用を貸し出し、教員の兼業免許を行ったが、教員の負担が増え、子供たちとの隔たりができていくという。学級担任を持たない、遠距離通勤の負担、学校再開の困難さなど、教師たちの悩みは尽きない。

ハートリンク物語

金子 喜代子 73歳
神奈川県 14分55秒



小児ガン死の子供たちは年間 800 人。幼くてもやがて再発や 2 次ガンの不安があるが、費用もかさむ。ところが保険会社の保険に入れないのが現実だ。新潟に住む一人の母親が娘のガン治療を契機に、わが国初の出資金で支えあふ共済制度「ハートリンク」を立ち上げたレポート。

夜から来た人たち

鏡摩 浩子 25歳
神奈川県 7分35秒



「結核の世界」を表現した砂絵と切り絵のアニメーション。ある夜、男の子は寝床で怪奇な現象を見つけた。部屋の家を舞う光の砂が人体となり、踊りだし、騒いでくると外へ来た。遠いかけた男の子が寄り取る。母が人体になり、少年を空中に吹き飛ばす。夢ではないのだ。

HOME ~僕には 2000 人の兄弟がいる~

馬場 靖加 23歳
神奈川県 17分50秒



孤児園エリザベスサングラスホームの出身の男性を取材。創設者の澤田美喜さんは戦後、連合軍と日本人女性の間に生まれた混血孤児たちを育てようと、私財を投じて寮の中で 2000 人もの子供たちを育てた。現在も施設は存続中。孤児から見た澤田美喜さんの姿を追う。

砂川の記憶 -57 年目の証言-

村松 拓 21歳
(中央大学 FLP
松野良一ゼミ)
神奈川県 10分



57 年前、急に起きた上った米軍立川基地拡張計画に対して反対される農民たちの激しい反対運動があった。今は平和記念公園等となった現場を訪れ、この砂川闘争を検証しようとした。容暴力、不従従で抵抗した農民たちの当時と現在の想いを伝える。資料映像が豊富。

オトノオト

小笠原 望野 21歳
富山県 6分12秒



イメージアート。「なりたいたいものにない」がテーマ。ピアノ好きだが、楽器は別の分野を志す自分も故郷で自分が書いた楽譜を見つけた。選択したことを心のどこかで後悔している自分に気付く。アルバムを使って、自分の中にある心の違和感を視覚と時間軸に表現した。

病院に通訳がいたらいいのにな

~ベトナム人特編~
NPO 法人多言語
センター FACIL
兵庫県 12分



中学校に通うベトナム人の女子生徒の会話。病院に通訳する自分の役割の付き添い。通訳は外国人にとって大きな負担になっている。日本語が苦手な外国人だけでなく病院、薬局にとっても診療での言葉や異文化のコミュニケーションの壁は大きい。必要とされる医療通訳者の現状を探る。

学ぼう! 命のつながり

~星山のカエルたち~
兵庫県立「ゆめさきの森
公園」学ぼうグループ
兵庫県 12分



新緑の季節になると、公園で星山の生き物たちが活発に活動を始めます。繁殖するカエルたちの天敵は蛇。シマヘビがクダガエルを飲み込んでいます。自然観察会では生き物の死を映像で子どもたちに見せ、食物連鎖と生きる暮らさるを伝える活動を行っている。

語り継ごう阿東の史話

台山のできごと
大野 遼二 71歳
山口県 17分51秒



地元に伝わる戦争伝説。山口市阿東地区の草刈場だった台山に、日本の戦艦機が不時着した。村を揺るがす出来事となったが、村人救出で村を築きつくり、無事飛び立つことができたという。若い飛行兵と村人の交流のエピソードを今も次世代へ語り継ぐ古き素材。丁寧な絵が魅力。

Coffee, Cigarettes and Chinese Massage

Jeff Kwok
香港 7分23秒



二人の女性がカフェでコーヒーを飲みながら、取り留めない文化論をフランス語で話さず。好みが違う二人だが、一致しているのは「中国は愛だ」ということ。中国人は甘いのが好き。どこでもタバコが吸えるのが好き。中国式マッサージにはまりそうな二人。自然体で美しい。

審査委員による真剣な討議。グランプリ〈ビデオ大賞〉の選考過程を公開。

TVF史上初の公開審査会(トークフォーラムドキュメント)



公開審査はTVF審査委員の大林宣彦(映画作家)、小林はくど(ビデオ作家)、佐藤博昭(ビデオ作家)、椎名誠(作家)、高畑勲(アニメーション映画監督)の各氏と主催者を代表する北見雅則理事が参加、下村健一(当NPO理事/市民ビデオアドバイザー)の司会によるトークフォーラム形式で行われました。

審査対象の優秀10作品は、どれもが作者の熱い思いと深いメッセージが織り込まれた完成度の高い作品であり、上映会で作品視聴した来場者は、それぞれが「私が推すビデオ大賞作品」を胸に秘めながら公開討論の成り行きを終始熱心に見守っていました。

ビデオ大賞は、「限界集落に命の糧と元気を運ぶ二人三脚の移動販売車」 76歳の市民ビデオ作家 内田一夫さんの手に。



小林 TVF応募作品を審査して感じることは、TVメディアが自己完結の「閉ざされた映像」で成り立っているのと比べるとTVFは「開かれた映像」の祭典であるということだ。開かれたというのは写されている自分、それを見ている自分が一体となっているということだ。審査委員の大林監督の最新作「この空の花—長岡花火物語」を見ても、物語りを見ている

自分の体験が重なってスクリーンにある。2013年の作品を見て感じたことは、多くの作品が現在進行形であるということ。過去と現在、そして未来を繋ぐ作品が多かったと思う。ゴーガンがいった「我々は何者なのか、我々は何処から来たのか、我々は何処へ行くか」という問い。TVF作品を見て同じようなことを感じた。入選作品の中には、エリザベスサンダースホーム、砂川闘争、太平洋戦争など、戦後の日本現代史そのものの作品があった。限界集落問題、沖縄問題、ベトナム難民、医療過剰など、現代の光と影をテーマにした作品が目についた。今年は3.11以後に発生した深刻な問題を取り上げた作品も27本あった。コミュニティのあり方、老後の生き方を考えさせられる作品も多かった。

今年の傾向として、60代以上の高齢者作品が全応募作品の35%を占め、20代の作品は50%だった。高齢者の自画像作品もいろいろあった。

大林 アメリカで映画関係の記者会見に出ると、アメリカ人は必ず「あなたの戦争体験は？」と聞いてくる。もともと映像というのは戦争を記録するメディアだった。戦後我々が見たアメリカ映画はアメリカの夢を表現するメディアだった。先日ニューヨークへ行って感じたのは、アートが市民権を持っているということだ。美術館では名画がオープンに展示されているが、変な目つきをする人はいない。アート作品には自ずと尊厳がありいたづらを許さない。普通のおじさんがアート作品を作り、無名のアーティストの作品が売れる。アートは市民の日常となっている。



ところでTVFの審査が公開審査ということになったが、審査の権威性を否定するものであり、作品には絶対価値はないということだ。公開審査とはオンリーワンを競う場ということであり、公開審査で作品の相対的価値を語り合うということだろう。

高畑 公開審査は面白い試みだと思う。私の基準はあくまでも私自身が面白い作品と出会うということだ。今回は老人作品が多かったが、どれも素晴らしい作品だった。

椎名 私は毎年々視点で作品を見ている。審査の基準は「現代をいかに見つめているか」ということだ。私の関心は、個人の目でなんの制約もなくまっすぐな目で本当の現代を見ている作品と出会うのが楽しみだ。

佐藤 僕は「誰かともう一度見たいと思う作品」を基準にしている。それは感動を共有したい作品なのかということだ。もう一つ大事なことは、「あと味」である。60年代～70年代のドキュメンタリー作品を見ると、作品としては完結していてもテーマとなった問題そのものは何ら解決してい

ないということがある。問題が未解決であることにあと味の悪さがあると思う。

北見 30作品を見てどの作品も紙一重の作品でできであると思った。私の審査基準は、作品を見て「泣けるか」か「泣けないか」にある。

小林 今回の応募作品は国内237作品、海外から4作品の応募があった。昔は国内外から毎年2,000～3,000作品の応募があり、私にはそれを全部見てきた経験がある。その時代の審査はまるで耐久レースのようだった。今回は237作品を30作品に絞りこんだ。

東日本大震災のその後を扱った作品、例えば「福島」と「フクシマ」のはざまに被災地で揺れ動く人たちの問題、私自身も仙台で建物の被害にはあったが、被災地での体験はしていないこともあり、「被災地出身なのにその瞬間に被災地には居なかった」学生の心情に共感するところがあった。「Gray Zone」も「オレの歌」も、共通しているのは「自分はいたい何なのか」という自問だ。自分の立場の整理がつかない思いが伝わってくる作品が多かったと思う。

高畑 「向き合う」というのは現代の流行のような気がする。若者たちは「自分と向き合う」のがハヤリのようだが、私は「事実とどう向き合うか」が大事ではないかと思う。向き合うのはいいが、向き合った結果どう変わっていくのか、そこが描けていない作品が気になった。



佐藤 そのことは裏返すと、その中途半端さが若者たちの現実なのかもしれない。あと味という点では、原発事故の保証金の格差の問題などもあるのが現実だ。

高畑 問題を話し合うだけで終わっているのが物足りない。それでいいのだろうか。

大林 「事実と向き合う」というのは重い言葉だ。最近「自分探し」とか「自分史」がクローズアップされているようだが、どうもあいまいさが気になる。3.11のことを思い返すと、あの時、私は福島に足を運ばなかった。何故行かなかったのか、都会からよそ者が出掛けて行ってどうなるのか、私の中には葛藤があった。

高畑 私も同感だ。もし、自分がでかけていくとすれば、それは被災者や被災地のためではなく、自分のために行くのではないかというためらいがあったことは確かだ。

大林 「Gray Zone」は「福島」と「フクシマ」と同じように「沖縄」と「オキナワ」の問題だ。沖縄の現地の人の声をよく表現していると思う。外側の人は是非かを語れるが、沖縄人はそう簡単に語れない現実がある。それが居心地の悪い作品にしているのかもしれない。

椎名 私も「Gray Zone」は、共感、共鳴して興味深く見た。とてもビジュアルな作品だと思う。沖縄の人は「アメリカ」を「アメリカン」と発音するが、それをうまく表現していた。

佐藤 なぜ作者がああ作品を作ったのか。作らざるを得なかったのか、そこが知りたかった。沖縄の若い人が「何も変わらない」と発言してい

この日最大のイベントは「公開審査会」です。全応募作品 241 本から選りすぐられた入賞 30 作品の、さらに厳選された優秀 10 作品がグランプリ（ビデオ大賞）の審査対象作品となり、TVF 史上初めての公開審査によって決定する新しいスタイルに挑みました。緊張感は会場の隅々まで広がり、審査委員の真剣な討議に参加者の視線は釘付けになりました。



この記事は「ビデオジャーナル/2013.2 第 1273 号」より（株）仲樹社様ご提供

たのが印象的だった。

権名 市民ビデオの作品にはマスメディアの作品にはない市民ビデオの力が素直に出ているのがいいと思う。「おくりもの」は市民ビデオらしいはつたりのないオーソドックスな作品だ。

高畑 どの作品も素晴らしいが私は「限界集落に命の糧と元気を運ぶ二人三脚の移動販売車」（以下、「限界集落」）がいいと思う。出てくる夫婦がいい、映像がいい、買いに来る村人がいい。笑顔のおしゃべりの中に日本の現在のコミュニティの問題が描かれているが、人と人の関係は決して失われてはいないことが実感できた。

権名 私も同感だ。「限界集落」は傑作だと思う。その他でも「おくりもの」「オレの歌」「Gray Zone」を推薦したい。

佐藤 「限界集落」は大きなテーマだが、作品はディテールを良くとらえている。バランスの取れた作品だと思う。

小林 「Gray Zone」は沖縄の女性の作品であり、浜辺に寄せる波、空にかざす手、蛇皮線の奏でるメロディーで沖縄を表現していたのがとても印象的だった。「限界集落」では移動車が去って行った後の風景が何とも切ないものだった。

大林 ニューヨークでグランドゼロに行った。そこは市民の広場となっていた。9.11の後アメリカは変わった。3.11の後日本人はどう変わったのだろうか。どう変わるべきかが問われている。そういう時に市民ビデオの作品を見た。面白い作品だったと思う。東日本大震災のその後を描いた作品は、どれも東北の被災者への鎮魂の作品であり、カメラワークも良い。「生きる！」も面白い作品だ。手術後の主人公の今を明るく生きようという姿勢に勇気づけられる。

北見 私も「生きる！」を見てたいへん勇気づけられた思いだった。

大林 「オレの歌」も面白い作品だ。ラップという形式の表現で作者の言いたいことがよく伝わってきた。芸術的ジャーナリズムは風化しないということだ。

小林 「生きる！」は主人公夫婦と手術をした医者などが一体となって完成された作品だと思う。

大林 「自分探し」という言葉が出たが、「生きる！」の手術場面はまさに「事実探し」であり記録映像の強さを見せつけられた感じだ。

高畑 私も手術の場面には驚かされた。よくああいう映像が撮れたものだった。「閉店の譚」「被災地との絆」「空を見上げて」も気がかった作品だ。

佐藤 「冬の陽気を夏に売れ」は天然氷の製造という珍しいテーマを取り上げて、天然氷ができるまでのディテールをよく記録している。私はこの作品と「限界集落」がいいと思った。

大林 「限界集落」には生活感がある。暮らし、なりわい、そこから来る



社会の在り方を考えさせる作品だと思う。

北見 私は「限界集落」と「被災地との絆」を見て、今の日本に失われつつある「恩返し」の気持ちとか「人のために役に立つこと」は何かなどを考えさせられた。

小林 自分が軸となる作品は自分以外には作れない。つまりテレビ局では「限界集落」は作れない。

権名 「限界集落」を見て感じたのは、撮る人、撮られる人の関係性の上に作品が成立しているということだ。マスメディアが撮影すればおそらく取られる人の表情が違ったのではないと思う。「空を見上げて」は下手をすればプロの手法をまねた作品になりやすいが、素人だからこそ作れるドラマの作り方があるはずだ。工夫すればもっと面白い作品になったと思う。

北見 「オレの歌」はラップという形で自分史、家族史を表現したユニークな作品であり、TVFに一石を投じた作品として価値がある。

下村 そろそろ集約に入りたい。討論を通じて、「自分と向き合う」か「事実と向き合う」かの問題、太平洋戦争時代や東日本大震災のその後をとりあげた作品にみられる「記録と記憶」の問題、高齢者の生きかたの問題、市民ビデオとプロのTV局が作る作品の違いなど、審査委員の皆さんから、市民ビデオの本質にかかわる発言や指摘がたくさんあったと思う。討論を通じて「限界集落」を推す意見が多かったようだが、ここで審査委員の皆さんから「ビデオ大賞」を推薦いただきたい。



大林 みんな素晴らしい作品だが「オレの歌」を推したい。佐藤「限界集落」、権名「限界集落」、高畑「限界集落」、小林「限界集落」、北見「オレの歌」、

下村 それでは「限界集落」が多数ということで、「TVF 2013 ビデオ大賞」は内田一夫作品「限界集落に命の糧と元気を運ぶ二人三脚の移動販売車」に決定しました。



このほか特別賞が決まり、「筑紫哲也賞」には「Gray Zone」（塚原真梨佳作品）、市民賞は「おくりもの」（佐藤好子作品）がそれぞれ選ばれ賞が贈られた。

（ご支援・ご協力をいただいた方々からのご挨拶（要旨））

●特別協賛：日本工学院専門学校長 千葉 茂氏

「TVFの活動は、映像関連の専門教育を行う学校にとって極めて関連の深いものがあり、今後も協力しあって大田区の地域文化発展に役立ちたい。」
 ＊東京ビデオフェスティバルの実施に当たっては、地元で映像関連の専門教育機関として定評のある日本工学院専門学校の協力なくしては成立しなかった。会場提供、イベント進行に放送や映像専門の学生がボランティアで参加いただき、発表会では200名もの学生たちの授業の一環として作品視聴の場ともなった。

●後援3団体の代表：大田区副区長 野田 隆氏

「その昔、松竹キネマ演劇撮影所が存在し日本映画のふるさとと言われる大田区蒲田で、このような価値ある映像イベントが定着しつつあることは喜ばしい。かつて映画の登場と普及は社会に大きなインパクトをもたらしたが、現在はTVFが推進している市民ビデオのように、映像で自分を表現し発信する時代だ。日本の映像文化の歴史遺産を有する大田区が、TVFの活動を通じて新しい映像文化の育成や発信の地として、地域社会の発展につながっていくことに期待している。」

ビデオ大賞・特別賞 [筑紫哲也賞/市民賞]

ビデオ大賞

『限界集落に命の糧と元気を運ぶ二人三脚の移動販売車』
内田一夫さん 76歳 埼玉県 (16分55秒)



筑紫哲也賞

『Gray Zone』
塚原真梨佳さん
20歳 京都府 (12分39秒)



● 塚原さんは家族のみさんと参加されていた



ビデオ大賞
特別賞
筑紫哲也賞



< 選評 >

小さな山の中腹に住むお年寄りたちが心待ちにしている移動販売車の来訪。大切な日常生活のライフラインとなっていると同時に、26年続けてきた安藤さんの言葉との穏やかな笑いの戸畑地会館が出現する。ご夫妻の、飾りではない配慮、努力、対話に、人に接する人生の原点を学ぶ。思いやりの交流を自然体で描いたこの作品。誰もが作者のカメラに身替えることもなく、いつもの暮らしと生活の空気感が溢れている。これはマスメディアには大刀打ちできない、市民ビデオ作家ならではの凄まじい。こうした山国に販売車が来なくなったときの地域社会はどうなっていくのか・・・。お年寄りたちが住むふるさとのコミュニティそのものの消滅が、今、各地ですんでいる日本の事実に見えてきます。

2013年1月19日 東京ビデオフェスティバル2013 審査委員会

< 選評 >

『Gray Zone』というタイトルに、先ず興味を惹かれます。一体何を描いているのだろうと。沖縄に生まれ育った作者が伝える、複雑なおもしろい作品はそれを、実写のオズプレイ配像を軸にして、両親や友人の語りとともに伝えていきます。

戦後から今日まで、沖縄住民にとって脅威であり続ける米軍基地。無い方がいいけれど……雇用を含む様々な恩恵があるのも事実。自立の意志が立たない沖縄において、基地との共存を真剣に考えるほど、賛成とも反対とも言えなくなってしまふ。途切れの思いのうちの「Gray Zone」。

沖縄米軍基地問題は、簡単に自決で解決できないほど複雑しています。作品の中で、作者のお母さんはとんかつを揚げながらのびのびと『Gray Zone』を語り、お父さんも、リラックス体で自身の考えを述べます。友人達も、野郎としての白黒はあっても、現実には折り合いどころを見つけようとしているように見えます。その何も感わらない率直な姿に、ぐっと引き寄せられました。

当事者でない筑紫は、「代弁者」としてではなく、「報道し続ける」という立場で沖縄に存在し、住民に「決して黙ってはいけない」と問いかけていたように思います。

複雑なことを複雑のままに声にした、『Gray Zone』。その声が、多くの人に聞こえることを願って。

2013年1月19日 筑紫哲也・ゆうな

市民賞

『おくりもの』
佐藤好子さん 80歳 東京都 (8分12秒)

市民賞の喜びを表す
佐藤好子さん



★NPOサポーターからの市民賞投票ベスト5

| | | | |
|----------------|----|-----------|----|
| おくりもの | 26 | 船店の唄 | 10 |
| 母の思い出 | 14 | 命を背負って | 10 |
| 限界集落に命の糧と元気を運ぶ | 14 | その魂を真に売れ | 10 |
| 被災地との絆 | 12 | Gray Zone | 10 |

★全27作品

東京ビデオフェスティバル2013 審査委員総評

芸術的ジャーナリズム

大林宣彦 (映画作家)



「自分史」という言葉がいつの間にか定着して、ビデオ作品の多くは自分を見詰めるという形で成熟してきた。所があつた2011年3月11日を経て、一気に自分と誰かや何かとの「繋がり」について、見詰めてみようという風潮に、主題が変化してきたようだ。そういう意味で今回この場に集った個人映像作品のどれもが、優れたジャーナリズム、それもマスコミでは決してない、文化的芸術的なジャーナリズムとしての役割を果たしていると思う。「Gray Zone」は、何事も直ぐ黒白で決着を付けたがるこの日本の現状に対して、強く逆もまた強く、しかしそれ故に真摯に生活感の中で沖縄問題を語り合う。そこから明日への道筋が垣間見えてくる所が切実だ。「限界集落〜」は過去と明日とを結ぶ今の危うさを描出し、日本社会のこれからと対峙する。「おくりもの」は失われたものが現在に活かされる事で未来と繋がる勇気となる。自分史では過去と繋がる今を見詰めたが、今年の作品群は過去と未来を結ぶ今を描いて、その今が小さな一歩であっても前進し続け、豊かな未来を手繰り寄せようと試みる。行動を続ける作品創りに感銘を受けた。

ベストな画面でなくていい

椎名 誠 (作家)



どなたの発案か、初の「公開審査会」であった。わかりやすくていい。「限界集落〜」がほぼ満票で今年のナンバー1になったが、その議論の傍ら、選考会側の司会者(テレビのプロ)が、わざと刺激するためか「プロがつかれば簡単にできる」…のような挑発的な意見を言った。素直なぼくは反論した。「プロが撮れば、技術的には簡単だろうが、被写体となった山村の老人たちの顔や動作やリアクションがあんなに自然には撮れないでしょう。プロには絶対にできない映像だ」そのときは、話はそれ以上発展しなかったが、受賞者が最後にその「ヨロコビの舟」を語るときに「これまでテレビ局が二回同じ被写体を撮影してきた。そのときマスメディアはより刺激的な映像を撮るためにいろいろ注文したようです。でも私がカメラをむけたときに一番中心的に撮影されるおばちゃんがこのヒト(受賞者) テレビのヒトじゃないから安心していいよ」とまわりの老人に言ってくれました」と話していたのが面白かった。

このTVFは、このように、テレビに代表されるようなマスメディアの作り方の真似やおっかけをしているのではない、ということがより明確にならないと(フェスティバル)の存在そのものに意味がなくなるのじゃないか、と思っていたから安心した。

現在進行形で体感する映像祭

小林はくどう (ビデオ作家/成安造形大学名誉教授)



35回を記念して初の公開審査を試みた。受賞作品がよかったせいか、大勢の観客がおいでになり、少し緊張したトークフォーラムとなった。受賞者の前で作品を語るの難しい。審査員が審査される心境だ。真剣勝負の熱が入った展開となった。観客も大半が満足したのではない。これはハラハラドキドキの現在進行形であるからだろう。皆で見守って行こうとするビデオ映像祭にはこれが相応しい。3・11以後、自分の現在の立ち位置を確認しようとする作品が増えた気がする。私も上映作品を観ながら、見つめ直そうとしていた。「Gray Zone」ではK市でのコミュニティビデオを振り返った。マスコミは外側から無責任に理想論や決着を迫るが、内側の地域内に住むメディアは自分たちで時間をかけて現在形を明らかにしていなくてはならないのだ。「福島とアクシマ」は福島、宮城を故郷に持つ私に対する自問と受け止めた。ポール・ゴーギャンの絵のタイトル「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」が気になってくる。「限界集落」「閉店の園」では以前に住んでいた町でのリヤカーによる自然食野菜の引き売り青年を思い出す。自然体のおしゃべりと笑顔こそがコミュニケーションの原点を再確認。そのせいか交流会では熱い作者たちに囲まれ、美酒に酔ったようだ。

人生の表現がいっぱいあった

高畑 勲 (アニメーション映画監督)



寄せられた作品の質の高さによって、今年もTVFの健在ぶりが証明された。まことに喜ばしいかぎりである。佳作を含め、中年以上の方々の作品はいずれもその年齢と実力が物を言っていることに敬服した。優秀作品賞十本のうち、みずからのことを語った作品が六本もあり、市民ビデオの基本はやはりそこにあるのかもしれない、ということをおぼろげに意識させられた。佳作のアニメーション四本はそれぞれ特色があり、入賞作全体に彩りを添えた。ビデオ大賞の「限界集落に命の糧と元気を運ぶ二人三脚の移動販売車」はほんとうにあつたかたて立派な作品だと思う。まさに表題どおりの内容。販売車の安藤さん夫婦の誠実周旋な準備から、集落での販売・配達・交流まで、まことに円滑に、十七分足らずの中に過不足なく捉えられていて見事だが、それだけではない。この販売車は、まるで田舎の教会のようなコミュニティセンターとしての機能を果たしている。毎週、安藤さん夫妻のおかげで、村人同士の交流の機会が生まれている。それが、説明ではなく、実感をもってほほくさとして画面から伝わってくる。そして、声を強めることがないのに、限界集落の問題点はおのずと浮き彫りになってくるのだ。

時代を象徴する優れた作品とその背景にあるもの

佐藤博昭 (ビデオ作家/日本工学院専門学校講師)



TVF初の試み「公開審査会」を終えて、例年以上の達成感があった。優れた作品を共有したいという目的が、この試みで新たな可能性を得たと思う。その場で僕は、優れた作品の「後味の悪さ」という言葉を使った。市民映像作家が個人の切り口で大きな問題に挑んだ時に、問題の大きさ故に残される「不安感」や「解決策の見えない憤り」がその後味を残す。「限界集落〜」では、過疎の山間部にわずかに差し込む美しい光を見た。移動販売車は既に売場を超え、人が繋がるための重要な「場」になっている。「ありがとう」と同時に、「いつまで続けてくれるのだろうか?」と大きな不安感が残る。「Gray Zone」の作者は、故郷・沖縄の現在を同世代の若者たちの意見を添えて示した。「何かの事件が起きた時だけ関心させる」本土の住人のひとりとして、彼女たちの言葉は重く刺さる。「基地はないほうがいいけれど…」という曖昧な答えは、その答えしか見いだせない、長年の苦悩の表出だった。個人がその家族や身近な人を見つめた秀作も印象に残る。TVFの伝統とも言えるこの分野でも「おくりもの」に代表される優れた形を見せてくれた。TVF2013を支えてくださった全ての作者の皆さんに、心から感謝します。

公開審査をやりたかった

北見雅則 (NPO法人市民がつくるTVF理事)



TVF2004から日本ビクターの社内代表審査委員をやらせて頂き、そうそうたる審査委員の先生方とお付き合いさせて頂いた。初めて大林先生にお会いした時に「見識のない私をお導き下さい」と申しあげると「解らない事を解らないと言え事こそ見識、あなたには充分見識がありますよ」と言って頂いた。その一言がTVFだけでなく、私の人生の指針となった。最終審査会が待ち遠しかった。訳の解らない主張をされても素直に「先生の仰言事が理解できません」と言える事ができた。私のそうした質問が先生方の新たな文化論を触発する事も多々あった。TVFの楽しみ方には三つあると思う。一つは「創る」事。一つは「観る」事。最後は「話す」事。私は最後の話す事をとて大切にしてきた。作品を創り上げた全ての想いと努力を私は知らないが、仲間として審査委員の皆さんと話し合う事でより深い楽しみを味わった。最終審査会を是非作者の皆さんと共有したいと長い間思ってきた。初めての公開審査/トークフォーラムが実現したが、まだまだエキサイトが足りない。来年に向けて更なる磨きをかけよう。作者の皆さんに喜びと満足が伝わるように。

新聞・雑誌

▶中国新聞 2013.1.21

▼沖縄タイムス
2013.1.21



▲伸樹社/ビデオジャーナル 2013.2.15号

TV放送



◀JCN 大田
「ディリーニュース」
2013.1.10
2013.1.18
2013.1.21



▲琉球新報 2013.1.22

▼玄光社/ビデオサロン 2013.3月号



■入賞者の方々からのご意見・ご感想

第一線の超多忙な方々に公開審査をしていただいたことは出品作家の立ち位置を鋭く問うものでした。もう一歩深く斬ることが問われた。と、また10作品に選ばれた自分の作が時代を問うものになっていなくなった。コメントに怒られたこともしっかり記憶できました。

パンフレット意匠が練られていて読みやすいです。映像配信としてDVD作品集の配布賞品の素敵な焼き物どれも応募者として愛好家にどうぞこんごとも精選してほしい。というTVFの作風がにじみ出ていて準備が大変な努力があったでしょうが、信頼感が伝わりました。

石川 勝 様 (栃木県)

優秀賞をいただいたこと自体、過分な評価でした。不当に、難しく、今後の励みになりました。

常日頃ゼミナールで文章を書くときにも、学生には「私は一思う」と書くな、と語っています。自分の「気持ち」だけ垂れ流しても誰の関心も引かない。むしろ自分と同じ考えを持たない人をそこそこ納得させるだけの事実で自分の主張を証明するんだ、と。僕が口頭語っていることが僕だけの考えでないことを、高橋さんを初めてとした審査員の方々の新しい言葉で学生は知ったと思います。

専修大学法学部 田村 理 様 (東京都)

受賞式の会場でのスタッフの方々の優しい対応。公開審査会場で審査委員の先生方から講評を頂いた事。交流会では、亡父を覚えていてよ、と声をかけて頂いた事。若い方も多め、多くの方々と親しく交流が出来、人持持ちになりました。

佐藤 好子 様 (東京都)

先日の心に残る発表会。素晴らしいかったです。遠い北海道から駆けつけて本当に良かったです。事務局の方々のおかげで努力に敬意を表します。有難うございました。

- ①初めての公開審査、私のイメージからすると、もっと白熱した議論を期待しました。時間の制約や公開の境界なのでしょうか。それでも、公開審査は大成功です。
- ②いろいろな作品に出会い刺激を受けました。
- ③ネームプレートは作者や作品名がわかり、交流会では沢山の方々に声をかけて頂き、コミュニケーションを深めることができました。

有沢 準一様・節子様 (北海道)

Q1. 初の「公開審査会」について 画期的でしたが、初めての事なので、審査員の方々も戸惑っていたようで、僕々評者の討論が空気がなかったのは残念でした。審査員の方々は、少なくとも優秀賞の10作品は見ている事が前提な訳ですが、スバリ、最初から、それぞれのグランプリ候補を3作品位づつあげて、討論しても良かったのではないのでしょうか？
Q2. 全体発表・表彰式交流会の進行・受付等について 概ね満足出来るものでした。ただ一つ、残念だったと思うのが、ショックだったのは、大林監督の「私は、10作品しか見せられてない」発言です。応募者としては、たとい佳作でも、自分の作品の評価は気になります。交流会で審査員の方と話したいところですが、見られていないのでは話にもなりません。入賞30作品は、審査員全員が視聴済みになるようご配慮下さい。

池田 悠 様 (栃木県)

良かった点は
(1)フェイスブックを活用されていたこと。これは個体が発信した情報を、受賞者各人がシェアすることで、速やかに正確に情報を共有出来ることに繋がったと思います。

(2)式典の際、佳作の一人一人の作品の内容を、口頭で述べて下さったこと。これは嬉しいものです。目を見て言葉で伺えたことで、さらにやる気がわきました。

要望
(1)ツイッター情報も欲しいです。より簡易な形での情報提供もお願いします。

と言った所でしょうか。この度は本当にありがとうございました。
ArtmicEnao (Shiro Tomura) 様 (東京都)

今年から始めた公開審査会はとても興味深く見せていただきました。そして審査員の先生方が作品をどんな目でみているかとても参考になりました。どこのコンテストでもそうですが、それぞれコンテストによって期待している作品がはっきりしていると思います。このところネタ切れの自分ですが、なんとかネタを探したいと思っています。

藤井 晋郎 様 (神奈川県)

初めて参加したが、若い人とお年寄りが入り混じっている映像祭は世界でも珍しく、とても驚いている。世代を超えたコミュニケーションが広がるいいイベントだ。主催者が配慮してくれた外国人(私)へのアテンドも素晴らしいと感じている。

Jeff Kwok 様 (香港)

たくさんのご応募、ありがとうございました。

| | | | |
|---|----------------|-----------------------------------|-----------------------------|
| 香港 | | ◆おくりもの | 佐藤 好子 |
| Aomame1Q84 | 黄 文傑 | おしぼりのおはなし | 安永 奈央 |
| The Keyholder | Jeff Kwok | オトコノ物語 | 百留 健治 |
| ▲Coffee, Cigarettes and Chinese Massage | Jeff Kwok | 落し物リレー | 日本工学院専門学校チーム 20 |
| ドイツ | | カレ カメラ | 磯村 武 |
| Warum ich Deutsch lerne | 岡本 隆史 | kawauso | コン・ナンイ |
| 北海道 | | がくふちくん | 日本工学院八専CG中川組 |
| ■生きる!〜夢をあきらめない〜 | 有沢 幸一・節子 | がんばっぺ!大船渡 | 万賀真奈美学生による被災地支援のための |
| ▲命を背負って〜家族と共に〜 | 友賀 豪 | 〜市民による支援活動から〜 | 市民メディアプロジェクト(武蔵大学) |
| おじいちゃんを訪ねて | 船越 龍洋 | がんばれ!!金太郎 | 日本工学院八王子専門学校マンガ・アニメーション科 |
| まかも成長記 | 大塚 鈴枝 | 君への手紙 | 馬場 美紀 |
| 森の恵に誘われて | 村上 博 | 気持の異なる「場所」SAVE 東松島 | 田中見希子学生による被災地支援のための |
| 岩手県 | | 〜被災地と SNS 〜 | 市民メディアプロジェクト(武蔵大学) |
| S・L 鮎川潤を走る | 阿部 秀次 | くつした | 加藤 郁夫 |
| 第八竜宝丸 | 千田 司 | ▲CLUSTY | 島田 洋平 |
| 茨城県 | | CLOCK | 日本工学院専門学校 1-2-J |
| ▲神様からの贈り物 | 長妻 洋 | 神戸の恩返し | 今井 康悟 |
| 記念写真 | 長妻 洋 | これから | 栗山 健一 |
| ゴーヤのひとり言・吾輩はゴーヤである | 米島 金次 | ゴースト君の日常 | イ・スンヒョ チャン・スーヒョ |
| 栃木県 | | 坂道 | 日本工学院専門学校 3-4-O |
| ▲原泉の謎 | 池田 悠 | さくら並木と共に | 古川 一清 |
| 聖鏡千本突破 | 石塚 祐輔 | サンタXクロス (-santaXclaus-) | 具 暹勲 |
| 水車のある風景 今では | 石塚 祐輔 | シャーロック・ホームズ&ジョン・H・ワトソン | Artrnic 8neo (Shiro Tomura) |
| 太古の習き | 篠崎 賢子 | シャゲちゃん | 豊島 優海心 |
| 2012 年足利の山 | 木村 歩 | ジュンブライド in Russia | 片山 正晴 |
| ■冬の陽気を夏に売れ | 石川 勝 | 重慶ビュー大都会の光と影 | 鈴木 賢士 |
| Minotree の生態 | 池田 悠 | 常識が問われる前に | 早稲田大学放送研究会ドキュメンタリー班 |
| 遼東瀾の嵐 2010 | 益子 光 | SUSANOO -スザノオ- | Artrnic 8neo (Shiro Tomura) |
| 群馬県 | | ▲ストーリー、初めての映画製作 | 石川 雅彦 |
| はれのちあめ | 青柳 完治 | Strawberry Kiss | 小林 祐介 |
| 埼玉県 | | SlapStick | 小原幸介・寒河江 涼・福田真由美・比嘉玲乃・慶後一貴 |
| 奄美大島の旅 田中一村をたづねて | 熊谷 千恵子 | 正義ロボ グランディヤー 発達秘話一 | 鹿田 敏 |
| 雨降れたんじゃく | 住田 勝 | そしがや夏まつり | 片山 正晴 |
| いさいさゆいゆい | 田中 道 | そのくま | 戸田 淳介 |
| 沖縄の古民家 | 斎藤 誠一 | 空がない障害者の写真展 | 鈴木 賢士 |
| ■限界集落に命の糧と元気を運ぶ二人三脚の移動販売車 | 内田 一天 | それでも父は起きなかった | 佐藤 千恵 |
| ▲ココロちゃん、どこへ行ったの? | 平野 隆弘 | 茶髪と坊主 | 辰野 信夫 |
| 桜が咲いた | 山口 亮 | ▲囃む | 辰野 信夫 |
| 淋しい太陽 | 加藤 秀樹 | ディディたちのマナスル | 舟橋 栄子 |
| ▲進め一徳火の玉だ! | 加藤 秀樹 | ▲凸凹カップル | 日本工学院専門学校チーム 16 |
| セミがいた/2012 | 松本 勲信 | 電話にでれんわ | 日本工学院専門学校 3-4-H |
| 白雪の忍野八海 | 斎藤 誠一 | 東京ドームでビールを売る私たち | 朴 聖煥 |
| 樋口一葉物語 | 川崎 君男 | 特攻兵士その遺族 | 高取 恒子 |
| ひとつの電球 ネパールからの問いかけ | 宮崎 孝 | door | 日本工学院専門学校チーム 21 |
| マンクに会いたい | 斎藤 誠一 | ドラマ「兄さんの帰宅」 | 工藤 謙介 |
| 落選作品まれまれ | 加藤 秀樹 | 2月 February | 佐藤 健人 |
| 和光市の宝・湧き水 | 木下 三重子 | ネコノセイカツ | 安藤 綾華 |
| 千葉県 | | NO COHERENCE | 日本工学院八専スタジオ5°C |
| アチャカ力が原 | 立石 恵一 | How Poor | ドグエンミンアン |
| 手筒花火が上がるまで | 池田 尚 | はっちゃんちいちゃん | 岡 香 |
| 天使の泣き声すこやかに | 後藤 アツ子 | happyturn | 日本工学院八専CG水落組 |
| ▲母の思い 〜あさりと竜さん〜 | 永井 美千代 | 花しくれ | 辰野 義正 |
| 東日本大震災 液状化そのとき!! | 川野 晶子 | 花炭探検隊 | 溝 宏樹 |
| ほだしと光 | 大塚 雅昭 | はらから | 日本工学院はらから制作委員会 |
| 東京都 | | ハラペコ昆虫記 | 兼次 達也 |
| 47756 ~介護福祉の現場から見えるもの~ | 川島 英人 | ばんさん | 日本工学院スタジオコッペパン |
| 8・15 流れる歳月流せぬ想い | 鈴木 賢士 | ヒーロー x ヒーロー | 谷 健二 |
| アーツソウル | 梅沢 千尋 | 被災地との絆〜日の出町から田野畑村へ〜 | 末谷 松万(中央大学 FLP 松野良一ゼミ) |
| 赤い絆 | 辰野 信夫 | ■ヒューマンシールド神戸 | 田村純也学生による被災地支援のための |
| あのね | 嵐 将人 | 「石巻での活動」 | 市民メディアプロジェクト(武蔵大学) |
| あべたかし GOLD レコーディング風景メイキングドキュメント | 佐藤 健人 | PizzaShop | 日本工学院 Uehara's STUDIO |
| 雨のしずく | 林 佑芳 | フェナキスティスコープ | 日本工学院 08studioCAL |
| ありがとう ~府中特別支援学校~ | 半谷 菜穂 | 4Sを活かした男 | 坂本 祥平 |
| 美しき小荷次郎家 ~伝統を守る~ | 山岸 太一 | 福島でこれからの生き方を考える | 高橋博行学生による被災地支援のための |
| Airplanes | 大宮剛・高村愛希子・安座間渉 | 〜信濃むつみ高校の取り組み〜 | 市民メディアプロジェクト(武蔵大学) |
| SL町なかを行く | 三浦 幸平 | l'esprit en suspens ~福島とフクシマの快闘で~ | 専修大学田村ゼミナール |
| 江戸川見聞録「子ども今昔」 | 江戸川区共育プラザ南小岩 | ■ふたつの星のイクシオン | 井筒 幸博 |
| fxxin' | 岩本 里余 | Fly | 小林 直樹 |
| 蘭病 FLY | 福島 友介 | | |

たくさんのご応募、ありがとうございました。

| | | | |
|----------------------------------|---|-----------------------------------|---------------------------|
| 「ふれあい交差点」で つながる地域の輪 | 石原夏 果学生による被災地支援のための 市民メディアプロジェクト(武蔵大学) | 新潟県 洗れるままに | 河辺 明彦 |
| PLANTSCOLLECTOR | 鈴木 孝寿 | 富山県 富山県 | 富山県立泊高校観光ビジネスコース |
| PLAYGROUND | 徐智明・川村慧・木村仁美・坂本将太郎・浦谷竜之祐 | 石川県 カラスの子育て記録 | 上野 陽亮 |
| ほいくし! | 五十嵐 あやか | 地域で子どもを育てる | 岡野 重和 |
| 「放射能って何?」 ～福島県南相馬市の子どもたち取材して～ | 若林舞学生による被災地支援のための 市民メディアプロジェクト(武蔵大学) | 長野県 芳心のひとり言 | 小野塚 了 |
| BO-4 ボヨン | Artrmic 8neo (Shiro Tomura) | 思い出 1998年6月8日から2012年2月22日 | 吉野 和彦 |
| POLTER FEE | 川瀬 紗織 | 我が町のココリナを奏でよう | 中沢 裕 |
| 舞桜 | 岩瀬 宏夫 | 岐阜県 本曾川の風が昭和を醸し出す馬場とその周辺 | 熊崎 真男 |
| maru.sankaku.shikaku | 里山 生武 | 静岡県 宰相の別邸 | 宮崎 宏 |
| 3つのお園い | 板倉 匠郎 | 滋賀県 オトノオト | 小笠原 里紗 |
| Music World | 磯原 桃子 | たなばた | 佐々木 春佳 |
| ムイとバム | 藤井 亮夫 | りん | 山村 衣紗子 |
| Mail of The Fate | 大田 翔士 | 京都府 ある子供 | 岩出 知也 |
| めがねとわたしとかれ | 日本工学院専門学校チーム04 | グッドデザインペイビー | 竹中 修 |
| Metamorphose | 日本工学院 SA10works | Gray Zone | 塚原 真梨佳 |
| memories | ビュンサンギ | 幻想京都音譜 | 塚原真梨佳・山本この実 |
| The Humen Toll 黙約 | 成國 英範 | 名作映画な1日を | 塚原 真梨佳 |
| 焼津へ | 松村 慎也 | まわるかめら・うつすひと・みるひと | 海野 良拓 |
| 世にも奇妙なストーリー「コップ」 | 日本工学院専門学校チーム19 | Lost ～たわひれゆく少女達の物語～ | 塚原 真梨佳 |
| ランブル! | 岩本 聖奈 | 大阪府 四人番号241の日記 | 松山 毅 |
| Little Small Wander | 梅村 賢吾 | 空 | (仮名) サイトー・project |
| 臨時発電 | 日本工学院専門学校チーム18 | どろんこ祭 | 紙本 勝 |
| 我が家の節電奮闘記 | 古川 一清 | 兵庫県 明石海峡うるわし | 広瀬 友三 |
| 私、メリーさん | 日本工学院専門学校チーム21 | 「オレの歌」 | MC NAM |
| ▲わたしたちは忘れない 福島避難地域の教師たち | 瀧本 雅典 | バス等はあのころのまま | 映像制作個人 |
| 私の大好きな家 | 松藤 華子 | ▲病院に通訳がいたらいいのにな ～神戸のベトナム人中学生編～ | NPO 法人多言語センター FACIL |
| Wonder Earth | 木村 晴隆 | ▲字ばう!命のつながり 一里山のカエルたち | 兵庫県立「ゆめさきの森公園」 字ばうグループ |
| 神奈川県 足柄茶 | 寄宿生活塾 はじめ塾 | 鳥取県 たなびの東京レポート | 米子高専放送部 |
| 雨の日の夢パーク | NPO 法人万-ペ-スたまりば | 鳥取県 空を見上げて | 左衛門の将来を考える会 |
| アングル | 社堂青少年会館 | 広島県 先人を想う時 桜... 舞う | 小林 千鶴恵 |
| いちご | 三上 尚美 | 挑戦 | 濱崎 就朗 |
| 妹 | 菊地 美帆 | 私はとうとうビデオにはまってしまった | 松田 治三 |
| うつぼかずら | 社堂青少年会館 | 山口県 あの頃のお前(息子)に | 山内 好照 |
| 海に浮かぶキャンパス～東海大学海洋調査研船 望星丸～ | 田中 依行 | ▲語り継ごう阿東の史話 台山のできごと | 大野 進二 |
| 俺の音楽生活 | 大山 尚輝 | 感動をありがとう ～2011山口国体思い出の記録～ | 石川 博基 |
| おわん三姉妹 | 寄宿生活塾 はじめ塾 | しりあって尻あって・・・横綱三連覇への挑戦～ | 大野 進二 |
| 輝きのために～空を翔る女性たち～ | 小幡謙・鈴木友香 | ドイツのクリスマスマーケット | 清澄 邦夫 |
| 教育現場のバリアフリー～オーダーメイドの拡大教科書～ | 小山綾子・原田沙里 | 表彰式 | 清澄 邦夫 |
| こいの物語 | 社堂青少年会館 | 愛媛県 アートフラワーに魅せられて | 例岡 正文 |
| 子どもの気持をわかって | 社堂青少年会館 | 川登川夜流し(小田川まつり) | 水沼 伸一 |
| 小学生～りっぱな大学生になる～ | 寄宿生活塾 はじめ塾 | 血が凍る景色 | 村上 泰一 |
| 小学生の日常 | 寄宿生活塾 はじめ塾 | しまなみ海道 伯方島 | 村上 泰一 |
| 自転車 | 社堂青少年会館 | 親切な三津の渡し | 井川 治 |
| ▲砂川の記憶～57年目の証言～ | 村松 祐(中央大学松野良一ゼミ) | スズメのお宿 | 河野 真美子 |
| 小さな命を守る神 | 藤井 育郎 | とこそ実れば | 伊藤 良子 |
| 社堂を救え | 社堂青少年会館 | 盛り家で磁器を焼くもくら家 | 岡野 鏡子 |
| 伝えていくということ～僕たちが見た3.11～ | 中島 聖斗 | ブラックバスの駆除作業 | 今井 策太 |
| 人間とは、なんだらう | 松本 晟也 | ▲閉店の譜 | 原田 恵美子 |
| 信長VS管仲 | 寄宿生活塾 はじめ塾 | 弓祈禱 | 中川 貴枝 |
| ▲ハートリンク物語 | 金子 喜代子 | るり燈まつり | 水沼 伸一 |
| 8時のニュース | 寄宿生活塾 はじめ塾 | わがまちの町並み案内 | 兵衛 省三 |
| バイオリン製作家 ～素材を音色に～ | 小林 奈緒 | 我家の度忘れ物語 | 黒河 貴 |
| バッグのバグ助 | 社堂青少年会館 | | |
| 拾われ猫ものがたり | 水越 理紗 | | |
| ▲HOME～僕には2000人の兄弟がいる～ | 馬場 航加 | | |
| 僕らのミネスクエープ～学生のメディア制作の現場～ | 松原 有輝 | | |
| 守ろう綺麗な街～それでもあなたは帰りますか～ | 岡口 祐也 | | |
| mission in 沼 | 寄宿生活塾 はじめ塾 | | |
| 未来に繋げる想い～被災地に届かせる桜～ | 春日 良大 | | |
| 夢をかたちに | 川崎 早哉香 | | |
| ▲夜から来た人々 | 薩摩 浩子 | | |
| LET OUT | 佐藤 皇太郎 | | |
| Left off Fuji | 寄宿生活塾 はじめ塾 | | |
| 私と妹 | 関宮 美南海 | | |
| 私の韓国のお友達 | 加藤 結佳 | | |